

県中教研 特別活動部会だより

第 33 号

発行日 平成30年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 山田 茂晴
題 字 金山 泰仁 先生

新学習指導要領の実施に向けて

指導主事 宮脇 哲也

10月17日に開催された中学校教育課程研究大会は、「互いに認め合い、高め合う活動」を焦点として、呉羽中学校、石動中学校で実施されました。

私は、呉羽中学校において、3学年の「進路」をテーマとした授業を参観しました。これまでの学校生活を振り返るとともに、今後の進路選択に向けて生活を見直し、学習環境を整えていく上で重要な方策となる事柄について、優先順位を付け、学級で取り組んでいくという内容でした。3年生にとって、進路選択は今後の人生において非常に重要であり、生徒たちは切実感をもって話合いに取り組んでいました。

また、今回「ダイヤモンドランキング」を用いることにより、生活班で班員一人一人の考えを確認し、意見交換しながら班の考えを固めていきました。「ダイヤモンドランキング」は、それぞれの考えをホワイトボードで可視化することにより、班員相互の思いが分かり、活発な話合いにつながっていました。その中で、互いの意見を尊重し、今後のクラスで大切にしたいことを一生懸命考える生徒の姿がみられ、「互いに認め合い、高め合う活動」につながるすばらしい実践となりました。

さて、教科書等の対応を要しない特別活動は、来年度から新学習指導要領によることとなります。新学習指導要領では、小中高の系統性が強調されています。今年度、富山市中教研特別活動部会が小学校の学級会活動の授業参観を実施しました。これから、県全体においても異校種間交流を広げ、学習の系統性をもった指導の充実に努められることを期待しています。

今後、各校におかれましては、新学習指導要領の趣旨を十分踏まえた指導となるよう対応をお願いします。

(東部教育事務所)

3か年の節目の年度に

部長 山田 茂晴

今年度は研究主題「学級活動において、よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育成するための指導・援助はどうあればよいか」の3年目となり、副題を「互いに認め合い、高め合う話合い活動を通して」としました。

第61回研究大会は、東部地区は富山市立呉羽中学校を、西部地区は小矢部市立石動中学校を会場として行われました。両会場とも生徒は明るく前向きに参加し、グループや全体で生き生きと発言していました。部会協議でも活発な協議がなされ、西部地区では授業力向上アドバイザー安部恭子先生より、示唆に富む講義をいただきました。

実践を通して工夫・改善されたことや成果として、「話合いにダイヤモンドランキング等の思考ツールが効果的に活用され、話しやすい雰囲気がつくられていた」「学習課題は生徒の実態に即して設定され、生徒にとって必要感、切実感のあるものだった」が挙げられます。

また、今後の課題として、「話合い活動の場で合意形成はどうあればよいか」「小学校までの話合い活動をいかに中学校で生かし、充実した話合い活動にしていくか」が挙げられます。

工夫・改善されたことや成果を生かし、課題を受け止めて実践を継続していくとともに、生徒の姿を通して、私たち教師も生徒とともにスキルアップしていきたいものです。

生徒は小学校で、話合いの進め方や参加の在り方等を身に付けています。私たちはその内容を把握して授業に生かしていくとともに、「いかにしかけ、その気にさせるか」にこだわっていきましょう。主役である生徒はもちろん、黒子である教師にとっても意欲的に取り組める実践でありたいと思います。

新学習指導要領のもとでの実施が始まる来年度も、県や地区の部会協議の場で交流し、互いの豊かな学びにつなげていきましょう。

(小・蟹谷中)

第61回 富山県中学校教育課程研究大会

東部地区（富山市立呉羽中学校） 平成29年10月17日（火）

第1学年では、「全員が集中して授業に取り組むための方法を考えよう」を議題に授業が行われた。まずアンケート結果から問題点、話し合うポイントを確認し、グループでランキング表を作成した。そして全体で意見交換し、学級で取り組む内容について順位付けを行った。どの場面でも生徒たちは真剣に考え、活発な議論を展開していた。



協議会では、「話し合いのルールや役割が確立され、日頃からの成果がよくみられた」「合意形成を図る手順

を明確にするとよい」等の意見が出された。

三日市寛指導主事（東部教育事務所）からは、教師の出番について、「教師の助言によって話し合いの焦点を明確にする」ことや、合意形成に関して、「拍手、挙手等の方法があるが、決定したことは司会者に宣言させると分かりやすい」こと等のご指導をいただいた。

木村 有希（下・入善中）

第2学年では、「感動を与えられる合唱にしよう」を議題にした授業が行われた。事前アンケートを基に練習方法を3つに絞り、4人班でそれぞれの練習法の利点と欠点を考えながら、ホワイトボードの座標軸にまとめた。その後、黒板に座標軸を掲示し、より効果的な取り組みの方法について合意形成を図った。

協議会では、「座標軸やホワイトボード等の思考ツールを活用することで話しやすい雰囲気が生まれた」「進行役の生徒を中心に議論が進められており、日々の話し合いの成果がみられた」等の意見とともに、「授業内で合意形成が不十分な場合はどのようなまとめを行えばよいのか」等、授業を行う上での悩みも聞かれた。

斉藤紀子指導主事（東部教育事務所）からは、「小学校では広く話し合い活動が行われており、中

学校でも、特別活動だけでなく様々な授業で話し



合い活動を行うことが求められる」ことや、「生徒一人一人が問題に対して切実な意識をもつ」「年

間指導計画を立てて確実に授業を実践する」ことの大切さについて助言をいただいた。

樋掛 香（滑・滑川中）

第3学年では「学習の円陣（エンジン）をスタートさせる鍵は何だろう」という議題の下、学力向上策について話し合った。

本実践では、方策の候補として9つの事柄が挙げられ、その順位付けをするためにダイヤモンドランキングが活用された。各自で順位付けした後、班でランキングを一つにまとめ、その後全体で実践していく事柄を絞り込んでいった。

協議会では、「考えをまとめる上で、ダイヤモンドランキングは効果的であった」「理由付けについて、より話し合いが深まればよかった」等の意見が挙げられた。



宮脇哲也指導主事（東部教育事務所）

からは、「3年生にとって、進路や学習は切実感のある話題であり、生徒は主体的に学級会に臨んでいた。また、人の意見を聞いて自分の考えを深めていく対話的で深い学びができていた。こうした学びの実現のためには、何でも話し合える雰囲気づくりを学級運営に位置付けていく必要がある。また、小中間で系統化を進めていく必要がある。」と助言をいただいた。

松田 明大（魚・東部中）

第61回 富山県中学校教育課程研究大会

西部地区（小矢部市立石動中学校） 平成29年10月17日（火）

第1学年の授業では、「とやまゲンキッズ作戦」の結果を基にして、「毎日元気に集中して活動するために、どんな生活をすればよいだろうか」を議題とした話し合い活動が行われた。

導入では、話し合う必要感を高めるために、とやまゲンキッズ作戦や事前アンケートの結果を他のクラスと比較したグラフを掲示した。この資料を基に多くの感想や意見を引き出すことで、問題点が明確になり、生徒らは話し合う内容について見通しをもつことができた。

班活動では、同じ悩みや問題を抱えた生徒を4～5人のグループにして話し合った。そのため、より具体的な行動目標や解決策が話し合われ、それぞれの考えを深めることができた。

全体の話し合いでは、ホワイトボードにまとめた



各班の意見を関連付けながら掲示することで、生徒らは互いの班の意見を容易に比較でき、自分にとってより実効性のある解決策を見付け出すことができた。

協議会では、話し合い活動におけるグループづくりの方法や、全体の場で意見を共有するためのホワイトボードの効果的な活用法等について、具体的な意見が提案された。

協議会では、話し合い活動におけるグループづくりの方法や、全体の場で意見を共有するためのホワイトボードの効果的な活用法等について、具体的な意見が提案された。

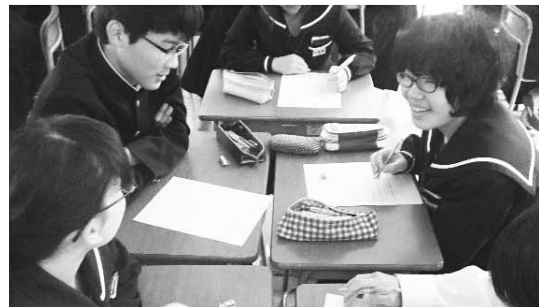
窪田俊介指導主事(西部教育事務所)からは、「本時の授業に向けて、事前アンケートやS Tの時間を利用して、生徒の実態把握が行われていたことがよかった」「SPDCAサイクルのS（スタンディング）の段階を大切にしたい」「これから生徒が実践した内容について評価する機会を適切に設けていくことで、生徒の意欲を更に高めることができる」等の助言をいただいた。

第3学年の授業では、生徒会が中心となって提案した「石中SNSマナー宣言」の取組を見直し、「SNSでは何に気を付けてメッセージを送ればよいだろうか」を議題として話し合いが行われた。

まず、「まじめだね」「個性的だね」といった言葉について、人によってどのように感じ方が違うのか、意見を出し合った。

次に、自分の送ったメッセージが相手に誤解を与えてしまったときにどのような行動をとればよいのか、グループで話し合った。生徒らは、具体的な場面を想定し、経験を基にしながら意欲的に発言していた。どの班も話し合いの雰囲気がよく、相手を尊重した温かい言葉が多く聞こえてきた。

グループの話し合った内容をシェアする全体の場では、発表者の意見にうなずいたりメモをとったりする生徒が多く、「今後どのように行動するか」「気を付けたらよいことは何か」等、自分の課題として真剣に考える生徒が多くみられた。



協議会では、「自己決定する場面で、もう少し生徒が深く思考できるよう切り返しの発問をしたり、学級全体に投げかけたりすることができればよかったのではないか」等の提案があった。

宮崎靖指導主事(西部教育事務所)からは、「情報教育やモラルについて扱うことが、最も生徒の行動につながる。生徒一人一人にとって必要感のある題材を設定する必要がある」「生徒の経験を語らせたり、お互いの気持ちを共感させたりすることで、より深い話し合いにつなげられる」等の助言をいただいた。 林 清記(南・福光中)

よりよい生活や人間関係を築く 特別活動の実践

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
国立教育政策研究所教育課程調査官

安部 恭子 先生

1 本日の研究授業から

全学級に掲示されている生徒会目標や、委員会が発案した学習掲示物から、生徒がそれぞれの立場からよりよい学校をつくろうとしていることが分かる。

一年生の授業では、導入が非常に効果的であった。養護教諭と担任との掛け合いは、T・Tのよさを生かしており、よく連携が取れていた。

後半では、小グループで出たアイデアを一つに絞らず、全て提示したのがよかった。各自の課題が異なるように、解決に向けての有効な方法も異なるので、いろいろな案を提示することで、自分に合ったものを見付け出すことができた。「自分の課題を見付ける・解決策を話し合う・課題解決に合う方法を選ぶ」という学習活動の後の「自分の目当てを決める」「実践する」という取組や、折にふれて「振り返る」という学習活動が特別活動では重要であり、大切にしてほしい。

三年生は、「SNS」という、これから社会に出ていく子供たちにとって身近な問題を取り上げていた。昨年度制定した「石中SNSマナー宣言」を名目だけに終わらせず、そこから見えてきた問題点を学級活動で話し合っている点が良い。

本時は多くの学習活動が設定されていたが、生徒はよく考え、意見を述べていた。さらに実りある話し合いにするためには、グループや全体での話

合いの前に個人で考えをまとめる時間を設定し、各自に自分の考えをもたせた上で話し合わせるとよい。また、最後のまとめは「気付いたこと」を書かせるのではなく、今後自分はどうするかを明確にすることで、実践につなげていくことができる。

2 これからの教育課程の理念

これからの教育課程の理念は「社会に開かれた教育課程」である。人工知能の飛躍的な進化に伴い、社会が大きく変化していくことが予想される。そのような時代に、今後求められるのは、未知に対応できる人材の育成である。「何を理解しているか(何ができるか)」「理解していることやできることをどう使うか」「どのように社会と関わり、よりよい人生を送るか」が育成すべき三つの柱であり、特に、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」が重要となってくる。

3 特別活動において育成すべき資質

特別活動は、全ての学習活動の基盤になる。学びに向かう子供を育てるには、子供たちが自主的・自発的によりよい人間関係をつくろうとする、学級経営の充実が大きく関わってくる。また、集団の中でしっかりと役割を果たしていることで、学びに向かう学習集団をつくることができる。

4 おわりに

がんばっている上級生に憧れている下級生が多い学校ほど、学校生活の向上を目指して主体的に活動しているという実態がある。ぜひ、特別活動を充実させ、生徒の力を引き出してもらいたい。

松本 真弓 (小・石動中)